

博士号請求論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 加藤有佳織

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 巽 孝之
文学研究科委員、Ph.D.

副査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 宇沢美子 Ph.D.

副査 カリフォルニア大学バークレー校名誉教授／ニュー・メキシコ大学名誉
教授 ジェラルド・ヴィゼナー (Gerald Vizenor)

論文題目

“Transpacific Fakelore of the Asiatic: Relocating Ethnicity in Nikkei Literature and Native North American Literature” (アジア人北米移住のフェイクローア—日系北米文学と北米先住民文学におけるエスニシティ模倣について)

加藤有佳織君の本論文は、13000年ほど前にアジア人がベーリング陸橋を渡り北米大陸へ移住したというアジア人北米移住説を背景に、日本人と北米先住民が共通の祖先を持つと仮想して書かれた文学作品の伝統を、19世紀から21世紀におよぶ文化史を視野におさめ具体的に例証していく独創的な研究である。日本こそ我が祖国と信じて漂着し我が国最初の英語教師となった Ranald MacDonald を皮切りに、現代の先住民作家 Gerald Vizenor、日系女性作家 Joy Kogawa や Cynthia Kadohata、Hiromi Goto らの作品を精読し、西部開拓と戦時強制収容の類比から日系移民が犠牲者でもあり加害者でもありうる可能性を抽出していく分析は手堅く、環太平洋的水準におけるアメリカ文学研究の新境地を切り拓くものと言ってよい。

Introduction: Asiatic Appropriation of North American Pioneer Narrative

Part 1: Native Japanese on the Frontier

Chapter 1: Mixed Blood Pioneer in Japanese Captivity: Ranald MacDonald's
"Japan Story of Adventure"

Chapter 2: Native Immigrants Itinerary: Gerald Vizenor's *Hiroshima Bugi: Atomu*
57

Part 2: Indian across Barbed-wire Fence

Chapter 3: Pioneer Narrative of an Internee Girl: Cynthia Kadohata's
Weedflower

Chapter 4: Internment Narrative of a Pioneer Girl: Hiromi Goto's *The Kappa*
Child

Conclusion: A Tribe of Immigrants, Stories of Tuttle Island

Works Cited

論文の概要

本博士号請求論文の目的は、13000年ほど前、アジア人がベーリング陸橋を渡り北米大陸へ移住したというアジア人北米移住説に依拠しながら日本人と北米先住民との類縁関係を仮想する文学作品の系譜を辿り、この説が日系北米文学や北米先住民文学においてどのように利用され濫用されているかを観察し、これらふたつの異なるエスニック・グループに架空の親類関係を見出すフェイクロアの一端を明らかにすることにある。

フェイクロア (fakelore) とは、まことしやかに語り継がれる偽造・変形された民話や伝承 (folklore) を指す造語であり、民話研究者リチャード・ドーソン (Richard Dorson) が著書 *American Folklore* (1966年) において初めて用いた。正統な民話伝承を攪乱するものとして、ドーソン自身は否定的に用いたが、本論ではこのフェイクロア概念を、むしろ偽造や変形の創造性を論じるために有益なものとして転用する。ドーソンが例として挙げるのは、西部開拓時代のカウボーイたちの間の伝説的英雄ペーコス＝ビルが実際には1923年(前身となる作品は1917年)にエドワード・オライリーによる創作であったことなどだが、加藤君は1930年代には科学的一説として受け入れられ、1960年代には広く知られるようになった前掲アジア人北米移住説もまたフェイクロアの一つとみなし、それに準拠して日本人と北米先住民が共通の祖先を持つと仮想する文学作品が19世紀末以来存在してきた事実注目する。おもに日系北米文学や北米先住民文学において見受けられるそうした作品の多くは、日本人や日系人と北米先住民との外見的類似をしばしば強調する。顔立ち、瞳や毛髪の色、肌などが「よく似通っている」と言う。祖先を共有するという想定は、日本人や日系人と先住民とのあいだの他人の空似を、何か必然的な親族の類似に変換してしまう。こうしたいわば架空の類縁関係により、それらの作品はより広い歴史的・文化的文脈へ再配置される。

このアジア人北米移住のフェイクロアは、日系北米文学作品や北米先住民文学作品それぞれを19世紀末の移民史に限定せず、より長い北米移住・開拓の歴史へと再配置する。そうしたより壮大な太平洋横断的タイムスパンにおいて日系北米文学作品や北米先住民作品を検討するならば、両作品の創造する自画像は、架空の類縁関係を持つ他者を媒体としているがゆえに、他者の自画像にも近似する瞬間があることが明らかになる。最初期の例として考察されるのは、スコットランド人の父とチヌーク族の母を持つラナウド・マクドナルド (Ranald MacDonald, 1824-94年) である。彼は、1848年、「母の祖先の地」と信じた日本へ偽装漂流し、長崎奉行の監視下で約10か月間、オランダ語通訳者に英語を教えた。彼の冒険記“*Japan Story of Adventure*” (1923年) は、上述のフェイクロア最初期のテキストであるとともに、日本開国やオレゴン併合による合衆国＝英領カナダの境界画定、大陸横断鉄道の建設といった出来事と前後し、国家横断的かつ太平洋横断的な物語の嚆矢としても重要なテキストであり、少なからぬ作家たちの手により翻案され続けている。このマクドナルドと彼の冒険をめぐる文学作品を概観するのが第1部序論“*Literary History of Ranald MacDonald: Transpacific Relocation of the Lost Pioneer*”の試みである。

マクドナルドの文学史は、彼を国民的英雄として特定の国家的物語のなかに位置付け

る段階と、国家横断的人物として描く段階とに分けられる。まずエメリー・エヴァ・ダイ (Emery Eva Dye、1855-1947年) による *McDonald of Oregon* (1906年) に始まり三浦綾子 (1922-99年) の『海嶺』(1983年) や吉村昭の『海の祭礼』(1989年) は、漂流民マクドナルドを、それぞれの国民的物語のなかへと組み込んでいる。一方で、ピーター・オリヴァ (Peter Oliva、1964年-) による *The City of Yes: A Novel* (1999年) やジェラルド・ヴィゼナー (Gerald Vizenor、1934年-) の *Hiroshima Bugi: Atomu 57* (2002年) は、マクドナルドを国家横断的な冒険のパイオニアとして描いている。ここで興味深いのは、それぞれの作品が異なる意図を持ちつつアジア人北米移住のフェイクロアを利用している点だ。マクドナルドをアメリカ合衆国の英雄として組み込む Dye は、まったく同時に、アジア人北米移住のフェイクロアを用いながら先住民マクドナルドをアジアと結びつけ、先住民が合衆国の領土拡張主義に対して持つ重要性や、先住民の消えゆく運命を正当化する。

マクドナルドの文学史をふまえた第1章“Mixed-Blood Pioneer in Japanese Captivity: Ranald MacDonald's “Japan Story of Adventure””はマクドナルド自身の冒険記を再考する。それは開拓体験記との日本捕囚体験記の混成であり、その混成テキストにおいて語り手マクドナルドは、フェイクロアを触媒としながら、自らのエスニシティを変転させる。つまり日本人・先住民・アイヌのあいだで比較および差異化を行ないながら、ときに白人としての日本人に自らを重ね、ときに先住民とアイヌを類比させ、マクドナルドは鎖国政策下の日本を訪ねた正統なパイオニアとして自らの冒険について語る。また、最近のマクドナルドの翻案であるヴィゼナーの *Hiroshima Bugi: Atomu 57* (2001年) は、共時的時間や伝統と革新、系譜の混淆、多言語的にして複数化された歴史を体現する混血インディアンのキャラクターの伝統を描きつつ、フェイクロアによるエスニシティの再配置をもくろむ作品である。本作がマクドナルドの冒険記を松尾芭蕉の『奥の細道』(1689年) やラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn、1850-1904年) の *Glimpses of Unfamiliar Japan* (1894年) と混淆させ、母方の起源を辿るマクドナルドの旅が形を変えつつ継続していることを体現している点を重視しながら、先住民を移民として再解釈する可能性を指摘する。

第2部は、日系北米文学におけるフェイクロアの利用を、より広い歴史的・文化的文脈において考察する。日本人と先住民の仮想された類縁関係は第二次世界大戦後には犠牲者同士の協働をもたらす。太平洋戦争時のアメリカおよびカナダにおける日系人強制収容は、19世紀をとおして行なわれた先住民の強制移住に連なる問題とみなされ、戦後の補償運動のなかで日系人と先住民との共闘可能性が意識されるようになった。たとえば日系カナダ人作家ジョイ・コガワ (Joy Kogawa、1935年-) は、その戦略的連帯を「日系人が原住インディアンと自己を同一化するというものすごく大きな課題」と表現する。犠牲者同士の連帯はたしかに政治社会活動のなかできわめて有効な戦略であった。こうした政治的な有効性を認めただけで、日系人が先住民に犠牲者として同一化することの文化史的問題もまた検討されなければならない。なぜならば、北米日系人については「先住民のような犠牲者」としての自画像が描きだされているものの、収容以前には先住民との差異化を図っていたこともまた歴史的事実であり、強制収容体験のみに注目し、それを日系移民史の提喩のように取り扱ってしまうのはあまりに健忘症的というほかないからだ。

第2部序論“Cultural History of Barbed-wire Fence”は、日系移民をより広い北米の歴史に再定位するための背景として、有刺鉄線の文化史を提示する。その歴史を紐解くならば、有刺鉄線のフェンスは、西部開拓と戦時強制収容が隣接するインターフェイスとして機能することが明らかになる。強制収容政策における西部開拓物語の翻案を端的に表すのが有刺鉄線のフェンスなのだ。戦時情報局による強制収容のプロパガンダがその好例である。日系収容者たちは開拓者でもあった。強制収容政策における西部開拓のイメージ借用は、強制収容という日系移民に対する制度化された人種差別を美化する一方で、収容者たちにとっても必要な物語の枠組みだったと言える。

第3章“Pioneer Narrative of an Internee Girl: Cynthia Kadohata’s *Weedflower*”と第5章“Internment Narrative of a Pioneer Girl: Hiromi Goto’s *The Kappa Child*”は補償運動以後の強制収容体験記、すなわちシンシア・カドハタ (Cynthia Kadohata、1965年-) の *Weedflower* (2006年) とヒロミ・ゴトー (Hiromi Goto、1966年) の *The Kappa Child* (2001年) を考察する。ともに、開拓物語と強制収容体験記を重ね合わせることにより、犠牲者として表象されてきた日系移民を開拓民として、より広い移住の歴史に再定位する作品である。*Weedflower* は、先住民居留区内の強制収容所ポストンを舞台とすることにより、日系移民が収容政策の犠牲者でありつつ、強制収容を美化した開拓神話の中では、灌漑農業に従事する無名の歩兵としての開拓民ともなりうることを描く。その点に注目した本章では、開拓民としての収容者が、収容所の外に暮らす先住民とのあいだに築く関係は、ただ無傷な友情ではないことを浮き彫りにする。*The Kappa Child* を論じるにあたっては、1960年代カナダはアルバータ州の日系開拓民を描くための参照枠としてローラ・インガルス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder, 1867-1957年) の19世紀開拓物語『大草原の小さな家』 *Little House on the Prairie* (1935年) を用いる。そこに生じるのは、日系移民の開拓失敗譚であり、第二次世界大戦時の強制収容の記憶を読み込む可能性である。かくして本章では、仮に開拓民になるとすれば、それは先住民の抑圧に加担する者とならざるをえないことに焦点を当て、犠牲者でありつつ加害者でもある日系移民の複合的自画像を再構築する。

以上の論脈より、結論“A Tribe of Immigrants, Stories of Turtle Island”においては、日系人と北米先住民とのあいだの他人の空似を親類関係に書き換え、人種的類似性を前提としながら両者の関わりを描くアジア人種のフェイクロアが、今後どのような文学的・文化的展開をみせるかを、日系アメリカ人作家カレン・テイ・ヤマシタ (Karen Tei Yamashita、1951年-) の最新作 *I Hotel* に収められた“Turtle Island”を手がかりに考察する。先住民もまた北米大陸への移民であると強調することは、たしかにある面では先住民の権利や被害を矮小化することにもつながるものの、それ以上に重要なのは、こうした視点を設定することにより、エスニック・グループのあいだの文化的交流を、移民の歴史における文化混淆としても捉え直し得る可能性である。

審査の要旨

加藤有佳織君の博士号請求論文は、江戸時代末期の日本を訪れた北米先住民ラナウド・マクドナルドの日本紀行にはじまり、日本文学にも造詣の深い先住民作家ジェラルド・ヴィゼナーの21世紀的ポストモダン小説、現代日系カナダ人作家ヒロミ・ゴトー

や現代アメリカ人作家シンシア・カドハタが日系強制移住のトラウマからの解放を語る少女文学へとおよぶスケールにおいて、日系移民と北米先住民という二つの民族集団の間に想定された文学上の親族関係(kinship)がいかにか戦略的に使用され、あるいは創造的に誤用されてきたかを検証する、壮大にして野心的な試みである。

なんとといっても加藤論文の強みは、このユニークなテーマ設定そのものにあるだろう。アジア系と北アメリカ大陸先住民の **inter-racial/ inter-ethnic** な関わりを主軸にしているからだ。往々にして白人を中心とする主流文学との相対的位置関係をもとに、アジア系もネイティブ文学も別個に論じられる傾向が強い風潮のなかで、あえてマイノリティ同士の関係を主軸に、しかも過去2世紀にわたる文学史を根本から見直す作業は、間違いなく新しい方向性を導く研究姿勢である。

折しも本論文における分析対象である北米先住民作家ヴィゼナー本人が講演旅行のため再来日を果たしたこともあり、加藤論文の審査委員会は一人の欠員もなく集合し、**2014年7月3日**（木曜日）夕方**5時**より六本木の国際文化会館会議室にて、厳正な口頭試問にのぞんだ。

審査員一同の第一印象は、きわめて好感に満ちたものである。なにしろこれまでの北米文学研究には見られなかった斬新なテーマ設定に加え、加藤君は、アメリカ研究、歴史、科学史、文学論、文学史と幅広い二次資料を積極的に渉猟しており、その意欲には驚かされる。骨太で大きな研究を実現するだけの調査力とテキスト読解力や発想力も、バランスよく持ち合わせている。いわゆる文学理論や物語分析の水準を超え、文化人類学的にして民族誌学的方法論をも積極的に取り入れた独自にして学際的姿勢には賞賛が集まった。

とりわけヒロミ・ゴトー論は加藤君の優れた着想を示す好例であろう。日系作家のゴトーの作品に跳梁跋扈する「カップ」が、実は従来考えられてきたように純日本的な存在ではなく、中国から日本へ、そしてゴトーとともにカナダへと「移民」し、その場で異なる文化的役割を担ってきたこと、すなわちカップ自体が三つのアジア（中国／日本／カナダ日系）を体現する混成的存在であることを論じ、そのカップの文化移動の軌跡とゴトー一家の個人的な移民史を重ね合わせている。それによって、これまでの先行研究とはまったく異なる、**multi-national**にして**multi-cultural**なヒロミ・ゴトー研究を構築することに成功している。

またラナウド・マクドナルド論は、カナダのブリティッシュ・コロンビア・アーカイヴ所蔵のマクドナルド日誌資料を調査研究することから出発しており、研究方法的にも着実に専門家の方向へ一歩踏み出した感がある。マクドナルドの日本探検の記録は、執筆者のみならず、アメリカ、カナダ、日本の解釈者によっても、それぞれ独自のロマンス化がなされてきたこと、その意味でフォークロアが、実は幾重にも作り込まれた人工性をまとうエスニシティを凶らずも露呈するとする結論にも、加藤君の発想力とそれを裏打ちする調査力・構成力が十二分に見て取れる。

しかし、ある程度の問題点を孕んでいるところも見逃せない。

まず一番の問題点は、本論文につけられたフェイクロアという用語の使用についてであろう。想像された親族関係とは、加藤君によればすでに誤謬として科学的には否定された言説である、氷河期最後のころにアジアから北米大陸へと人や動植物がベーリング海域（当時は **land bridge**）を越えて移動したと考える「移住理論」が、そこでは出発点

になっている。本博士論文タイトルにもあるフェイクロアのゆえんである。ところが本論を俯瞰するに、加藤君はこの造語の発案者ドーソンの否定的な疑似民話の考え方 (fake) をむしろ積極的に誤読し、fake/authentic の二極性そのものにゆさぶりをかける。そして加藤君は移住理論自体が疑わしいものとして今日「否定」されたと語るのだが、それとマクドナルドの時代にあったこの考え方の受容とは、じつは別次元の問題ではないだろうか。後世の目からみて、マクドナルドのアジア系ルーツ探しを良くも悪くも fake と呼ぶことにどの程度の妥当性があるのか。さらにグローバルな移住理論には多種多様なものがあり、細部で意見は分かれるものの、基本的に移住はあったことが認められている。そもそも fakelore と folklore を本質的に分けることなどできるのか。folk culture にとって fakery こそ必要不可欠な一部ではないか? といった疑問が当然湧く。

本論においてはフェイクロアの名のもとに、様々なフィクションの要素が言及されるという構成になっている。マクドナルドという北米先住民によるアジア系ルーツ探しも、また彼の日本紀行の様々な版における差異も、日本人作家たちによる "good will visitor" としてのマクドナルド像の鋳型直しも、ジェラルド・ヴィゼナーの *Hiroshima Bugi* においてマクドナルドとラフカディオ・ハーンとのあいだに仮想された類縁関係も、その変奏である。シンシア・カドハタがポストンへの日系収容を描く *Weedflower* が、合衆国政府側の開拓体験記を反復しながら脱構築する瞬間に、先住民の少年フランクとの淡い恋がさしはさまれるところや、ヒロミ・ゴトーの日系/カップの太平洋横断的移住体験記がローラ・インガルス・ワイルダーの『大草原の小さな家』を反復し損なうところ等々、すべてがフェイクロアの名のもとに(強制)収容されている。しかし実質的に第二部を成す日系作家論のなかでは、加藤君のフェイクロアの最初の定義はまったく影をひそめているように見える。要するにフェイクロアの定義自体が不安定であるがゆえに、加藤論文の第一部と第二部は何か架橋されているという印象を免れない。フェイクロアは日本、カナダ、アメリカの三国を環太平洋的に結ぶ literary bio-geopolitics を編むためのいわば苦肉の策であり、多くの資料を読みこなし、ここまでまとめたその無心の努力を評価するものの、やはり本論のなかのフェイクロアという支柱には、もう少し理論的な深みが欲しかった。そのためにはおそらく、passing や trickster, appropriation など、これまで異なる文脈で議論されてきた概念とも連動させ、民話のタイプ分け作業で終わりにすることなく、さらに多角的な検証作業を行なう必要がある。

また各作家たちの一作品だけがそれぞれ主に取り上げられていく展開になってはいるものの、同作家の他作品を含めたうえでの評価基準も打ち出すべきであった。とりわけカドハタ作品は児童文学として軽んじられることも多いだけに、こうした小説にたんにシリアスな問題意識を読み込むだけでは不十分である。いかにしてその作品の再評価が既成の文学史を書き換えるための戦略となりうるのかという点も、いま少し自覚的に吟味すべきではなかったか。

とはいえ、以上のような課題はたしかに残るものの、資料整理をはじめテキスト分析力と読みやすい英文構築力、テーマの面白さと今後の発展性においては、瞠目すべきオリジナリティを備えた博士号請求論文になっていることについては、疑いない。このような判断から、加藤有佳織君の博士号請求論文は十分に課程博士の学位に値することを、審査委員会は確信するものである。